工芸室の窓から

No. 13　2019.10.21.

小海高等学校生活指導係発行

日々の経験を力に

この度の台風１９号にて被災された地域、皆様にお見舞い申し上げます。学校再開後、保護者の皆様には生徒の送迎などにご協力いただき、本当にありがとうございます。すべて通常通りとはいかないものの、学校に生徒の笑顔と活気があふれている現状に感謝しています。

生徒の皆さんには、今回の台風被害についていろいろと考える材料があると思います。幸いにして被害の無かった人も、自分の見知った場所の変わり果てた姿を目の当たりにしたり、被害地区のニュース映像を見たりして、防災に対する意識を新たにしたことでしょう。かつての防災訓練で「高校生としては自分の身は自分で守ることは当たり前で、小さい子供やお年寄りなどの救助側としての役割が期待されている。」と消防署の方から話がありました。次回の防災訓練では取り組む姿勢も変わってくるのではないでしょうか。

１８日の信毎記事の中で、初めてボランティア活動に参加した長野高専の３年生徒は「困っている人がいたら助けることは日常の中でもできます。そうした積み重ねがあれば、災害時のボランティアもためらわずに参加できるのではないか」と話しています。同じ紙面にはボランティアに参加した須坂高校生の記事がありました。ぜひ読んでみてください。

続いては本校生徒の話題です。野辺山発小諸行きのバスに小海駅で乗車しようとしていた高校生４名がいましたが、あいにく２台のバスは満席でした。「何人かここで降りて、学校まで歩いてくれないか。」とお願いしたところ。男子６名が快く応じてくれました。感謝の気持ちとともに、清々しい行動をここに紹介します。困ったときはお互いさま、ましてや災害時です。困っている人達にどんなサービスが提供できるか、そのサービスをできるだけ多くの人が受けられるにはどうしたらいいか。皆さんにもできることはきっとあります。

最後に残念な話題です。事務室の先生に塗り替えていただいたばかりの廊下の壁に、サンダルで足跡を付けるという心ない行動が１週間に２件も起こり、担任の先生を通じて強く訴えたところです。他者への感謝の気持ち、思いやりの気持ちを持ち、心の痛みが分かる、想像できるような生徒として成長して欲しいと強く願います。